

2013年4月14日 主日礼拝説教（要約）

聖書 ペトロの手紙一 4章 7～11節

「万物の終わりが迫っている」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

「万物の終わりが迫っています」。ペトロは、この世を生きるキリスト者たちに具体的な勧めを語ってきましたが、その締めくくりとして、私たちの生活と奉仕のすべては、終わりという一点から考え整えられるべきであると言うのです。

「終わり」というのはギリシア語でテロスという言葉で、目的という意味をもつ言葉です。万物を造り、万物を支えておられるお方が、創造の目的を成し遂げられます。神がいきいものを審きかつ救われるのです。神がお始めになったことを完成されるのです。

したがって、聖書が「終わり」というとき、それは世俗的終末論がしばしば連想する滅亡、破局、破滅といったイメージとは全く違います。神の救いが成し遂げられるのです。「迫っています」というのは、「近づいた」という言葉の現在完了形で、主イエスがガリラヤで宣教の第一声を挙げられたときの「時は満ちた、神の国は近づいた」と同じ言い方です。神の確かなご支配は、主イエス・キリストによって確かに来たのでした。教会の存在はそのしるしです。そして教会は今、神がすべてを完成されること、さまざまな弱さと欠けをもった罪深い私たちも、終わりの日、主イエス・キリストが完全に救ってくださることを信じて生きているのです。

初代教会の人々が、「万物の終わりが迫っている」というとき、そこでは主の再臨の時間的接近が意識されていました。けれども、主の再臨がまだ実現していないことは、その信仰が間違っていたということではありません。主が本当に身近におられて、自分たちはそのことを考えずに生きていくことはできないという思いなのです。主のご支配とその審きと救いをリアルに感じ取りながら、主の約束に生かされているのです。

パウロはフィリピ 3: 13～14 でこう言っています、「兄弟たち、私自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えくださる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」。最後のゴールを知っているからこそ、私たちは目覚めて、後ろ向きにならずに、走りぬくことができるのです。

「万物の終わりが迫っています」。終わりの日の希望を見据えるとき、そこからどんな生き方が生まれてくるのでしょうか。まず「だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい」とあります。「思慮深くふるまい」は、「心を確かに」とも訳されます。「身を慎んで」は、もともと酒に酔っていないことをあらわす言葉で、「冷静であれ」とも訳されます。それらに「祈りに向かって」という言葉がついているのです。すべてが祈りへと結集され、集中されていくキリスト者の生き方が鮮やかに映し出されています。

す。決してあわてたり、あせったりするのではなく、おかれた状況を冷静に受けとめながら、忍耐強く御心を求めて祈り続けるのです。

ペトロがこのように勧めるとき、彼は自分が主イエスに連れられてゲツセマネの園に行ったときのことを考えていたのではないかと想像している人がいます。自分はどんなことがあってもつまづかないと豪語していたペトロでしたが、ゲツセマネにおいては、すっかり眠りこけてしまったのです。主の思いにも自分たちがおかれた状況にも気づかなかったのです。他の弟子たちも同様でしたが、主イエスはそのような中で救い主としての使命を全うするために、父なる神に祈っておられました。そして、私たちに語りかけて言われます、「誘惑に陥らぬように、目を覚まして祈っていなさい」。

次に「何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです」。

「心を込めて」という語は引っ張るという意味をもつ言葉で、ある緊張感を伴っています。次の「愛は多くの罪を覆う」とも関係しますが、人間の罪に目を塞ぎ、それをごまかすのではなく、罪は罪とし、間違いは間違いとしつつ、罪の力に引きずられている魂を愛し、その救いのために努力するのです。主イエス・キリストが私たちを受け入れ、罪を赦してくださったように、私たちも罪の赦しに生きるのです。

愛の具体的実践として、「不平を言わずにもてなし合いなさい」と勧められています。安心して泊まることのできる宿がなく、旅行にはいつも危険がつきものであった時代に、信仰の仲間である旅人をもてなすことは美德であり、なくてはならない奉仕でした。

さらに、「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい」と勧められます。カリスマはカリス（恵み）から生まれた言葉で、世間でよく使われる特殊な技能や能力ではありません。私たちはともすれば自分に与えられた賜物を見失い、軽蔑したまま、他の人の持っているものをうらやましく、ねたましく思いがちです。しかし、一人ひとりには例外なく神の恵みをいただき、預かっているのです。パウロが「私の恵みはあなたに十分である」（コリント二 12：9）という御声を聞き取ったように、私たちはどんな弱さの中でも神の御業のために用いられるのです。私たちは、御言葉を語り、証しし、奉仕するにあたって、与えられた賜物を主と教会のために捧げていきたいものです。

そして、それらが用いられるときに忘れてはならないことは、自分の栄光や名誉ではなく、すべてにおいて主イエス・キリストのことが明らかにされ、神が栄光をお受けになることです。神を神としてあがめ、讃え、従うこと、それこそがこの世を生きるキリスト者としての私たちの最高・最大の使命です。